

著者の主要メッセージ

1. 気候危機は turning point を超えている。ここまで深刻化したのは先進国の帝国主義的生活様式（資源浪費的大量消費）と global south の存在
2. 打開策としてのグリーン・エコノミー（再生可能エネルギー、電気自動車等への大規模投資：気候ケインズ主義）に展望はあるか？ No! 経済成長と二酸化炭素削減の同時追求（デカップリング）は誤り
3. 「脱成長」が必要。資本主義の下では脱成長は不可能。何故なら成長が資本主義の本質だから。
4. 解決策は「脱成長コミュニズム」以外にない

5. マルクス再解釈：進歩史観をめぐって

マルクスの進歩史観は「生産力至上主義」＋「ヨーロッパ中心主義」とされてきたが、晩期マルクスはこれを否定していた。

マルクス（1818-1883）

1843 ヘーゲル法哲学批判

1848 共産党宣言

1849 賃労働と資本

1859 経済学批判

1867 資本論 第一巻

1874 ゴータ綱領批判

68年以降のマルクスは

- 「生産力主義」・・・ドイツ農学者フラスの「略奪農業」批判に注目
- 「ヨーロッパ中心主義」・・・ナロードニキ（資本主義の段階を経ずにロシアは社会主義に至ることが可能か）に肯定的に回答。資本論の歴史分析は西ヨーロッパに限定される。

斎藤氏・・・未完の「資本論」を「脱成長 Kommunismus」の理論化によって引き継がなければならない。

感想とコメント

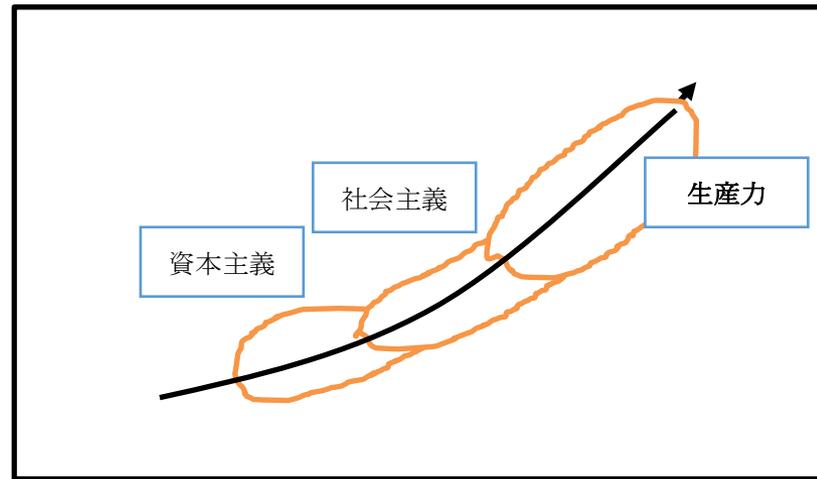
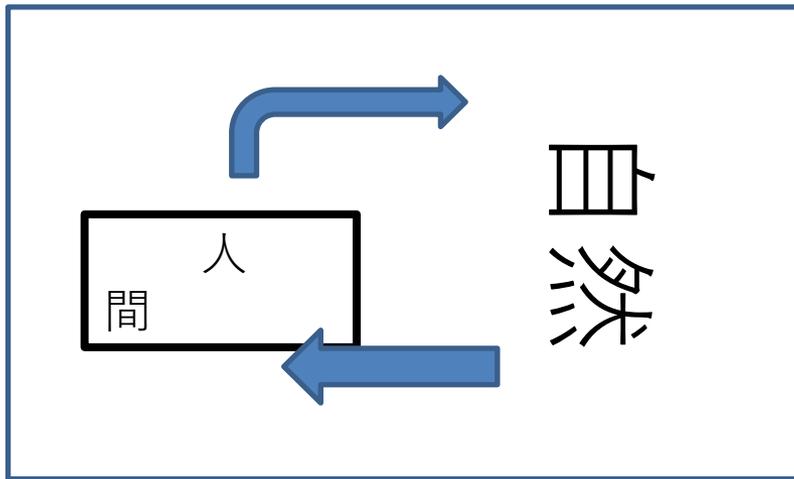
評価できる点：気候変動が資本主義、社会主義を問わず、また先進国、途上国を問わず、深刻で緊急を要する地球的課題となっていること、その危機をここまで深刻にしたのは先進諸国の生産と消費の構造（帝国主義的生活様式）およびそれを可能にしたグローバルサウスの構造であるとの主張は説得的で評価できる。

しかし

疑問点：対応策として提起される「脱成長コミュニズム」に至るまでのロジックには、多くの疑問や未解決の分析課題が残されている。

疑問点を中心に5点にわたって述べる。

1. 生産力について



著者の生産力や技術に対する捉え方が否定的に過ぎるのではないか。

- 人間はそれ自身自然の一部として、自然に働きかける（労働）ことによって、生存を維持してきた。
- 自然は変化する（①それ自身、自律的に、②人間の活動によって受動的に：人新世）ので、人間の自然制御（コントロール）力を高めなければ、存続を維持できない。つまり生産力を高めなければ人間は存続できない。
- 生産力と生産関係に関する『経済学批判』の考えは、生産力至上主義として否定されるものではない。

2. 脱成長コミュニズムの具体的なイメージ

具体的に5つを提起（第7章）

- ①使用価値経済への転換
- ②労働時間の短縮
- ③画一的な分業の廃止
- ④生産過程の民主化
- ⑤エッセンシャル・ワークの重視

この中で①③④は理解はできるが、具体的な課題として抽象的すぎる。

- ②労働時間の短縮は重要。それは、過労死、家庭崩壊、精神的病、自律的生活の劣化という視点からだけではなく、高い生産力を何に生かすかという視点からも。
- 通常、好況期は良い時期、不況期は悪い時期とされている。しかし、生産財を増やして将来の消費財生産を準備する我慢の時期、「本来は苦しい時期」が「好況期」で、その準備が終わり、いよいよ成果を消費財の生産で刈り取る「本来は楽しい時期」が「不況期」、という逆転現象が資本主義経済では生じる。
- それを本来の形に戻すのが脱成長で、それは

労働 { 生産財の生産・・・本来は 「厳しい」 準備の時期
消費財の生産・・・本来は 「楽しい」 成果享受の時期

自由時間・・・ 本来は 「もっと楽しい」 時代

- しかし、現在、「楽しい消費財生産」も「もっと楽しい自由時間」も資本の収益活動に取り込まれている。高いブランド商品、ネットサーフィンに一日5時間（18-22歳スマホでのネット利用時間は1日5時間以上が22.7%）、作られた観光地巡り本来の時間の使い方に戻すのが「脱成長」
それは資本主義経済のもとでも実現できるし、部分的であれ、徐々に達成されてきた。労働時間短縮の歴史、北欧

3. 市場経済をどう生かすか

齋藤氏は市場経済を否定？

- 「第6章 欠乏の資本主義、潤沢なコミュニズム」の資本主義批判
「・・・資本主義は人為的に『希少性』を生み出し、人々を『欠乏』状態に置く・・・」
- これがMarxの本源的蓄積の評価にも通じる
通説（生産者を生産手段から切り離し、資本主義的蓄積の基礎を作り出した歴史過程）に対して、齋藤氏（豊かなコモンズを解体し、人為的に希少性を作り出し、人々を欠乏状態に置く歴史過程）
- 希少性とは
希少性：土地の共有→私有 土地を希少性の下に置く
 水の共有→私有 水を希少性の下に置く
要するに、希少性とは商品経済のこと

4. コモンは局所的にはともかく、ある程度規模が大きい発達した資本主義経済で可能か？

齋藤氏はコモンズを高く評価

「・・・コミュニズムとはコモンを取り戻すこと・・・コモンのポイントは人々が生産手段を自律的・水平的に共同管理することである。・・・市民の手による『市民営化』と呼ぼう。」「これを電力、エネルギーからさらに広げて生産手段の共同管理が必要になる。」ワーカーズ・コープ

「・・・もちろんワーカーズ・コープも一歩外に出れば資本主義の競争に巻き込まれる。・・・それゆえ、最終的にはシステム全体を変えなければならない。」

「要するに、コモンが目指すのは人工的希少性の領域を減らして、消費主義・物質主義から決別した『ラディカルな潤沢さ』を増やすことにある。『ラディカルな潤沢さ』が回復されるほど、商品化された領域が減っていく。・・・GDPは減少する。脱成長だ。」

あまりにナイーブで、市場メカニズムを否定して社会は機能するのか？

5. 決定への参加

全ての社会構成員が決定に参加できるコミュニケーションにはどのような仕組みが必要か、可能か？

直接民主主義 ネット社会で可能性と限界

多少とも規模の大きい、そして各構成員が判断能力を持つ社会においては困難。

間接民主主義

代議制

重層的・区分的・・・国、地方、企業、地域、・・・

市場・・・各個人が需要者として意思表示

齋藤氏：市民議会を評価

欧米の市民議会(citizens' assembly)はイギリスの環境運動「絶滅への叛逆」やフランスの「黄色いベスト運動」を通じて注目されているもので、その特徴は「・・・市民議会の特徴は・・・選挙ではなく、くじ引きでメンバーが選ばれる・・・くじ引きと言っても完全にランダムではなく、年齢、性別、学歴、居住地などが、実際の国民の構成に近くなるように調整される。」「・・・専門家がレクチャーを行い、そのうえで参加者は議論を行い、最終的には、投票で全体の意思決定をする。」

これは資本主義社会において労働者、市民の運動によって実現しようとしてきた、そして部分的に達成してきた方向ではないか？